

日本列島全体の大地がジオパークだ

―大地の恵み、地域の活動を知るために訪ねよう―



日本ジオパーク委員会委員長
財団法人国際高等研究所所長

● 尾池和夫

1. はじめに

日本ジオパーク委員会の第一回が開催されたのは二〇〇八年五月二八日(水)の午前十時から、東京の産業技術総合研究所の秋葉原事業所の大会議室であった。

日本ジオパーク委員会の発足に際して寄せられたユネスコの松浦晃一郎事務局長からの、日本はともすれば世界遺産に目を向けているが、今回いよいよ日本のジオパークが世界にアピールできることになり、喜ばしい……という趣旨のメッセージが披露された。

この第一回の委員会で私が委員長として選出され、町田洋先生を副委員長にお願いした。委員会の最初の仕事は、ジオパークの推薦の手続きをどうするか、ジオパークの審査の基準をどうするか、応募資格をどのように定めるか、ジオパークネット

ワークの設置やガイド養成の支援体制をどうするか、というような基本的なことについて方針を決めることであった。

特に、世界ジオパークへの申請の基準に関して活発な議論があり、今までともすれば西欧の安定大地の古い地質に価値があるとされている傾向に対して、日本列島のできたばかりの大地の価値をこれから認定の基準に持ち込む必要があるという考えが強調された。

2. 立ち上がった日本のジオパーク

それまでにすでにジオパークを設立したい、と考えて用意している地域がいくつもあり、委員会の動きを待ちかねている人たちがいた。その人たちに説明するときの基本をしっかりとっておかないと混乱すると思った。

その要点を私なりに並べると、以下のようなこ

- とになった。
- (1) ジオパークは箱物行政ではないこと
- (2) あくまでもソフト行政的な仕組みである
- (3) トップダウンで計画することではなく地元の人たちが自ら考えていること
- (4) 国から金を取ってくるのではなく、民間の活力で動くこと
- (5) ジオパークがあるというだけでなく、地域の人びとの活動に意味がある
- (6) 急がずに大地に足の着いた活動であること
- (7) アイデアで勝負すること
- (8) 活動する人のネットワークをつくること
- (9) ジオパークは地元の価値の再発見である
- (10) ジオパークは地域での人づくりに貢献すること
- (11) 自治体としてジオパークのために優れた地学教員の採用を進めること
- (12) ジオパークの専属職員を確保すること

―などをメモして、さまざまの疑問に対応する準備をした。

事務局の産業技術総合研究所には、地質調査情報センターがあり、地質・地球科学に関する企画・立案・調査によって地質に関する情報を提供している。そこに長年にわたって継続的に蓄積されてきた情報があり、地質に関する最新の知見を体系的に融合している。それは、国土の利用、地震・火山等の災害対策、資源の確保、環境問題などへの対応に使われる公共財である。

そのセンターに事務局が置かれており、ベテランの地球科学者がいることが、何よりも私にとっては心強いことであった。

一方、日本地質学会では、日本の地質百選(<http://www.gsj.jp/geo100/>)を指定している。それがまず私の学習の情報源であった。地球物理学者の私は、活断層の研究で地形を見る目を養ってきたが、地質学、鉱物学には比較的なじみがなく、ジオパークの仕事を進めるためには、まずは地質学の現在を学習することが大切であった。

事務局へ提出された最初の申請は、北から順に、洞爺湖有珠山、糸魚川、山陰海岸、四国、島原半島の五つであった。その申請書を委員に読んでもらって、まず書類審査をし、それをもとに議論して、現地審査に行くかどうかを判断した。各地域に委員が二人ずつ、事務局から一人が現地審査に出向くという形式が、このときに生まれた。

最初の頃の挨拶で、インターネットで「ジオパーク」というキーワードで検索したら、NHKの「スタジオパーク」の記事ばかりが出てきたので、これを変えるのが私の目標だと話したが、二〇〇八

年末の段階では、「ジオパーク」の新聞記事検索結果は三十件に達した。

例えば、二〇〇八年十二月九日の読売新聞(北海道)には、次のような記事が載った。

「アポイ岳」と「洞爺湖有珠山」、日本ジオパークに―貴重な地質遺産の保護や活用を目的とするジオパーク(地質遺産公園)の国内版「日本ジオパーク」に、道内から「アポイ岳」(様似町)と「洞爺湖有珠山」(伊達市など四市町)が選ばれた。日本ジオパーク委員会が八日、発表した。

認定されたのは全国で七地域。このうち洞爺湖有珠山など三地域は、世界ジオパークネットワーク(GGN)が認定する国際版「世界ジオパーク」の候補地にもなっている。

アポイ岳は、鉄やマグネシウムを多く含む「かんらん岩」から成る山で、「ヒタカソウ」などの希少高山植物の群生地として知られている。坂下一幸・様似町長は「これまでの啓発保護活動が評価された」とコメント。今後は解説板や標識を整備し、将来的に世界ジオパーク登録を目指す。

定着した「ジオパーク」という言葉

このように、ようやくマスメディアに「ジオパーク」というキーワードが登場したが、右の記事のように、(地質遺産公園)とか、(地質公園)というような日本語の括弧書きが付いていた。この括弧書きがなくなるようになることが私の願いであった。

例えば、「エコツーリズム」というような言葉

はすっかり定着していたが、「ジオツーリズム」というカタカナ語をあえて、日本語の辞書に持ち込むことを密かに目標にしていた。

ジオパークとは、地球を学ぶために、地球を理解するために、そして大地の恵みを正しく活用するために、地域の人びとが活動する公園である、と私は考えている。地質だけでなく、地形も地理も歴史も生活も食材も酒も、その地域の大地に関連するあらゆるものが、ジオパークのテーマである。

そのように説明しているうちに、今ではすっかりジオパークという言葉が定着し、記者が「ジオパークとは何ですか?」と聞いたあと、「えっ、まだ知らないの!」と答えることができるようになった。

この一年間の新聞記事を、あるデータベースで検索してみると、「ジオパーク」が三千四百八十件、「大地の公園」が百六十二件、「地質公園」がまだ残っていて六十五件であった。また、国語事典にも一部ようやく「ジオパーク」という項目が登場した。

「ジオ」という言葉は、地球の固体部分を意味する接頭語である。ジオパークという言葉そのものを日本語の中に定着させたいと思っている。この言葉とともに、たくさんの方が参加して、ジオツーリズムが盛んになってほしいと思う。

ジオパークのさまざまな形での活用を通して、地球科学の成果を学び、二十一世紀の人類の課題である地球環境、エネルギー、資源の問題を考え、生命を生み出した大地のしくみを考える機会を、特に未来に向かう子どもたちに持つてほしいと



獅子吼高原から手取川扇状地 (白山手取川ジオパーク)



下仁田の跡倉クリッペのすべり面 (下仁田ジオパーク)

願っている。

3. 日本列島全体がジオパーク

ジオパークを、あるいはその候補地を訪れたとき、私はいつも、そのジオパークの成り立ちを語る「物語」を求める。地球全体の中で、日本列島全体が特別の変動帯にできた列島であり、日本列島の大地のあらゆる場所が、ジオパークの資格を持つっていると私は言ってきた。地元の人たちが、

訪ねて来た人たちに伝えるとき、そのジオパークの成り立ちの物語が大切である。

日本ジオパーク委員会の事務局である地質調査情報センターから出版されている地質図を見ると、日本列島では火山岩類、堆積岩類、変成岩類などが、大変細かくモザイク状に並び、きれいな模様を作り出していることが分かる。

そこに多くの構造線や活断層や活火山もある。ヨーロッパやアメリカなどの地質図を見ると、同じ地質が広く分布している場合が多く、活断層や活火山は存在しない地域が多い。安定大陸と東アジアの変動帯の大きな違いがそこにある。

私はよく地質のちがいを具体的に見るために、同じような距離の海底トンネルの工事のときの地質図を比べる。

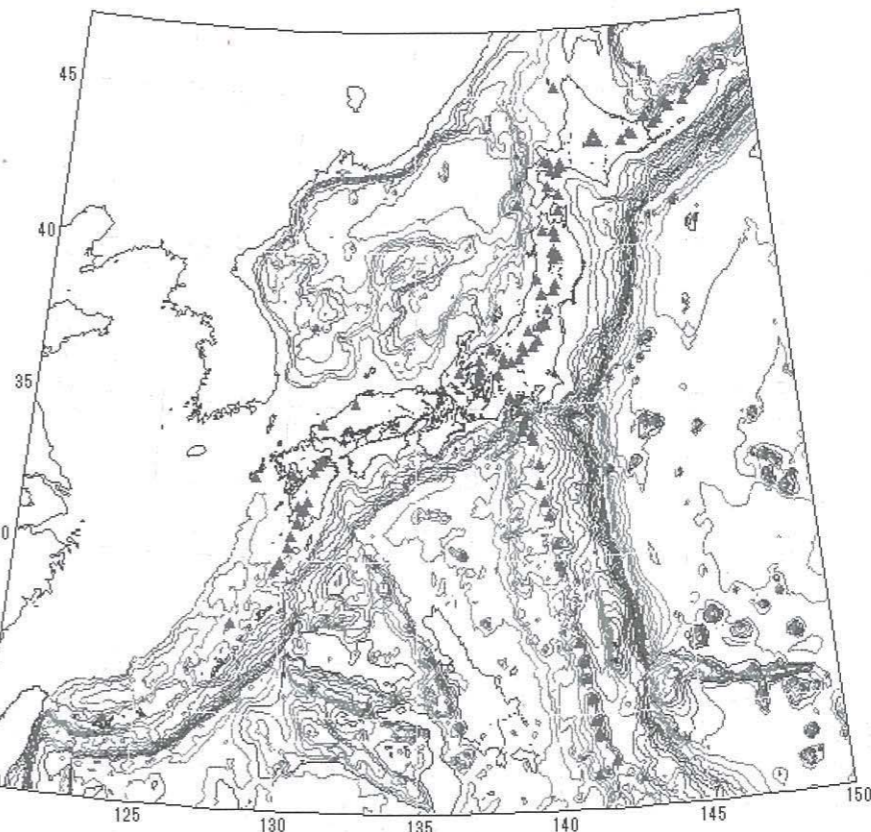


図1 日本列島周辺の海底地形、活火山、活断層の分布

青函トンネルの長さは約五十四キロ、英仏海峡トンネルの長さはほぼ同じ五十キロであるが、前者は第三紀火山岩や堆積岩の複雑な構造が断層で断ち切られている地下を、二十四年の歳月をかけて掘られたのに比べて、後者は中生代チヨークの割れ目のない地層に沿って、十一年で掘られた。

日本列島の構造線や活断層

層帯で区切られ、活火山が活動して姿が変わっていく、あるいは巨大地震が起こって大地が目に見えるほど変形するというような変動帯の特徴が、世界ジオパークネットワークの概念にも、今は新しいものをつけ加え始めている。

日本列島の大地全体に、私はジオパークを名乗る資格があると思っている。その大地の仕組みを科学的に語る組織があくまでも重要なのである。日本列島を具体的に観察するために、列島の大地を示す海底地形と活断層と活火山の地図を載せておく。この図にそれぞれのジオパークの位置を重ねてみて、変動帯の日本列島での位置づけをもう一度考えてみてほしい。

4. 日本初の世界大会

第五回ジオパーク国際ユネスコ会議 (5th International UNESCO Conference on Geoparks) が日本の島原半島で開催されることになった。二〇一二年五月十二日(土)から十五日(火)まで開催されるジオパーク国際ユネスコ会議は、世界ジオパークネットワークが二年ごとに開催する国際会議である。

地球科学、地球環境、観光、資源、地域経済など、多くの分野の研究者、行政担当者、ジオパーク関係者、市民などが参加する会議である。日本で初めて開かれるこの会議が、地球を学ぶためのジオパーク関係者間の連携を深める機会になると確信する。

島原半島ジオパークは、二〇〇九年八月二十二日、糸魚川、洞爺湖・有珠山とともに、日本から

初めて世界ジオパークネットワークへ加盟した。そして島原が国際会議の開催を提案し、マレーシアのランカウイで開催された第四回ジオパーク国際ユネスコ会議で、第五回の会議が島原半島と決まった。

世界ジオパークネットワークは、二〇〇四年に設立され、二〇一一年八月現在、二十五カ国の七十七の地域がこのネットワークに加盟している。日本からは、前記の三カ所にその後、山陰海岸が加わり、いま、室戸が申請して審査結果を待っている(九月十八日に認定された:編集部)。

5. 20カ所になった日本ジオパーク

二〇一一年九月五日に開催した日本ジオパーク

委員会では、新たに六カ所の日本ジオパークネットワークへの加盟を認めた。これで、全部で二十カ所の日本のジオパークができた。

しかし、それぞれの地域の現地審査をした委員からは、それぞれの地域の特徴に応じて、現状から判断して早急な改善が求められ、厳しい注文を付けて加盟を認めるということになった。認定書は洞爺湖・有珠山で九月末に開催される日本ジオパークネットワーク協議会の会場で交付される。

新しく日本ジオパークになった六カ所のうち、白山手取川と下仁田の写真を紹介しよう。

世界ジオパークネットワークの方針では、四年に一度再審査が行われ、前回の審査のときに指摘された改善点がどのように進められているか、というようなくとも厳しく審査することになってい

る。実際、それで取り消された地域もすでに実例がある。

日本ジオパークの場合も、いよいよ再審査の方針を具体的に決めなければならぬ時期になってきた。それぞれのジオパークが委員会からの指摘事項をしっかりと意識しながら、せつかくの「大地の価値」を伝えるように改善の努力をしてほしい、と願っている。

子どもたちが未来の研究者となり謎を解き明かしてほしい

そのためにも、多くの市民の皆さんが、二十カ所になった日本のジオパークを次々と訪ねてほしい。そして、そこで多くの質問をガイドに発してほしい。ジオパークをテーマにして写真撮影を楽しみ、吟行俳句会を開催し、絵を描き、詩を詠んで、大地の価値を表現してほしい。さらに地球を研究する、あるいは地域の文化や歴史などを研究する研究者がもっと多くの研究成果をそれぞれのジオパークに提供してほしいと思う。

いつも現地でお願いするのは、まだ科学的に分かっていないことを具体的に「分かっていない」と説明してほしいということである。ガイドの方が自分の知らないことをいかにも分かっているように説明することは、絶対にやってはいけない。分からないことがたくさんあるということを知った子どもたちが、未来の研究者になって、それらの謎を解き明かすために仕事をしてほしいのである。そのことがジオパークの最も重い役目にもなっている、と私は思っている。